



ミスは熱いうちに打て

入試が近づいてきました。中3生たちは、連日苦手科目と格闘しています。この間、ある中3女子が自分のデイリーレポートの片隅に「数学に負けた日」と記しているのを見つけて、思わず「負けるな、頑張れ！」とつぶやいてしまいました。

さて先日、文部科学省で開催された「教育改革国際シンポジウム」に参加し、PISA（国際学習到達度調査）が与えた影響について、OECDのシュライヒャー局長をはじめ各国の教育責任者の報告を聞いてきました。教育先進国フィンランドの成績にかげりが出始めたこと、日本の成績が上向いてきたのは「ゆとり教育」の反動から授業時間を増やした結果ではなく、前の学習指導要領から続く「総合的な学習の時間」の取り組みが実を結んだからであることなどがデータとともに示されていました。ただここで皆さんが心配していたのが、日本の子どもたちは成績が良いのに自己肯定感が極端に低いということです。確かにそうかもしれません。

その理由のひとつが、ミスをするに対する日本の子どもたちの意識の特性にあるような気がします。ミスをしたところを放っておくから、また同じようなミスをしてしまう、だから自分でも「ああ、だめだなあ」と思ってそのままにしてしまう。そしてまた同じミスを繰り返す。これでは自分に自信が持てません。ミスをするには誰にだってあるし、正解にたどり着くために必要な場合だってあるのに、ミスをするに臆病になっている。自分の気持ちの中で無かったことにしておきたい心理が、計算間違いや漢字の書き間違いなどをすぐに消しゴムで消したがる癖につながっているようにも思えます。だったら発想を逆にしましょう。ミスは熱いうちに打てばいいのです。ミスをまず自分で認識し消しゴムは使わず二重線で消す、その下にすぐにその場でやり直したものを書き込んでいく。ノートに何個のマルがついたかではなく、二重線を引いた場所がいくつあるかを自分の達成感のモトにすればいいのです。入試の場で頼れるのは、ミスに打ち勝つ自分だけなのですから。